

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號六第 卷三十二第

行發日一月二十年五十大

### 論叢

足利時代の通商貿易

教授 文學博士

三浦 周行

家屋税の本質

教授 法學博士

神戸 正雄

表定進賃論

教授 經濟學博士

小島 昌太郎

### 時論

英國勞働黨の農政方針

教授 法學博士

河田 嗣郎

### 說苑

マックス・ウェーバーの政策論の根本概念

講師 經濟學士

藤田 敬三

露西亞に於ける農政改革とその效果

經濟學士

吉川 秀造

### 雜錄

領主擁護の農民騷動

教授 經濟學士

黒正 巖

民文に就きて

教授 法學博士

財部 靜治

美濃名森村の地割制度

教授 經濟學博士

本庄 榮治郎

サミュエル・ベイリー

講師 經濟學士

森耕 二郎

最近の露國組合運動

和歌山高等商業  
教授 經濟學士

岩城 忠一

### 法令

健康保險法施行令・外國人土地法施行令

### 附錄

本誌第二十三卷總目錄

前世紀の二十年から三十年に至る約十年の間

は、英國の經濟學は洵に類ひなき科學的活氣を以て充たされたる時代であつた。それはケネーの死後幾多のエコノミストの輩出したかの佛蘭西經濟學のストゥルム、ウント、ドラック時代にも比すべきものである。アダム・スミス、マルサス、リカアアの所謂英國正統派經濟學は已

にそれ以前に於て大約完成せられ、それらの學説は當時の英國の學問となりつゝあつたものであるが、特にリカアアの學説は當時の學問界、實際社會に大なる影響を及ぼし、多くのリカア

ド信奉者を麻ら得たものである。所謂リカアア・デアン(セイムズ・ミル、マカロック、デイ・クリンシイはその主なるもの)なる一群の學者が先師の學説をその儘、又は皮相的に踏襲し、それが廣布宣傳に努めると同時に、従來の學説に對して論駁、抗爭したのは恰もこの時期に當る。そこででは諸々の評論雜誌、パンフレット、匿名著作を通じて、幾多のスパラシイ理論的試合が行はれた。こゝに紹介しようとする一匿名著作者、サミュエル・ベイリーはかゝる時代に於ける

最も卓越せるリカアア批評家の一人であつて、その明徹なる論理を以て、リカアア及びその學徒の經濟學特にその價值論の不備、矛盾を突くあたり、多くのリカアア祖述者を以て周章狼狽せしめたものである。

ベイリーの學説はその學問的意義の大なる割合に一般には知られてゐない。一般經濟學史でそれを取扱つたものは一つも見當らない位である。一二の價值學説史に極めて簡單なる紹介がある外には、嘗つてセリグマンが「On Some

Neglected British Economists」なる論文に於て、ベイリーの學説に就て若干紹介したことがあり、(註)又已に早くマルクスはこの學者の學問的價值を重視し、その著書の諸所に於て、その缺點を指摘すると同時に、その犀利なるリカアア批評を誰にも勝りて尊重してゐる。私も嘗つて拙著「リカアア價值論の研究」に於て、このベイリーのリカアア非難の若干を二三の個所にて、不十分乍ら紹介、吟味したことがあるが、最近この匿名著作の原著を更になほ二三手にするこ

- 1) Cannan の Theories of Production and Distribution にも取扱はれてゐない。祝んや Gide, Hanev その他の學史に於ては尙更然り。
- 2) Kaudla, Die geschichtliche Entwicklung der modernen Werttheorien, 1906, Liebknecht, W., Zur Geschichte der Werttheorie in England, 1902.
- 3) The Economic Journal, vol. xiii, 1903. Seligman, Essays in Economics, 1925 に收録。

とを得たるを幸ひ、こゝにこの小文を草し、ベイリーの生涯の片鱗を傳へ、その著作、學說の一端を紹介して見ようと思ふ。

(註)セリゲマンはベイリーが(一)價値の要素として時間を重視したること、(二)勞動價値説に反對したること、(三)地代理論を擴張したること、(四)地代は價格に入らぬとする説に對して批評したること、(五)生産力の價値に及ぼす重要を認めたることを以て、彼れの學的功績としてゐる。こゝに私の問題とするところと全然に於て異なる。

二

ベイリーは一七九一年シェフィールドの一商人の子に生まれ、彼も亦初めは商業に従事してゐたが、數年にして可なり莫大なる財産を儲け得たる後、實業界から退き(但し一會社の社長を引續きしてゐたのは例外)、その地方の事柄に身を委ねつゝ、(一八二八年シェフィールド町のトラステイに擧げらる)、自分の好むところの思索——政治、經濟、哲學、文學の凡ゆる方面に於て——に耽り、幾多大小の著作を物した。彼は極めて熱心なる一進歩的自由主義者であつたが、別に積極的に政治的活動に關與する意思が

なかつたに拘はらず、彼れの友人、尊崇者などの懇請により、二度代議士の候補に打つて出て、二回共に失敗した。彼は當時 Bentham of Hallamsire として知られてゐたと云はる。その死去するや(一八七〇年一月十八日)シェフィールド市に八萬磅以上を遺贈し、當時の人士の視聽を敬てしめた。

彼は獨り經濟學上の問題のみならず、哲學上の問題(パークリーに對する反駁その他)をも取扱ひ、又文學にも嗜好を有し、詩も書いてゐる。がこゝには主として經濟學者、經濟學批評家としてのベイリーを問題とするに止める。先づ初めに彼れの經濟學上の著作(その多くは匿名である)を、私の知る限りに於て、左に年代順に列擧して見る。

- 1) Essays on the Formation and Publication of Opinions and on other Subjects, 1821 (2d ed. 1826, 3d ed. 1837)

- 2) Questions in Political Economy, Politics, Morals, Metaphysics, Polite Literature, and other Branch of Knowledge, 1823.

1) Palgrave's Dictionary of Political Economy, 1919, Vol. I, pp. 82-3. The Encyclopaedia Britannica, 9th ed. Vol. 3, pp. 241-2.

- 3) A Critical Dissertation on the Natures, Measures, & Causes of Value, chiefly in reference to the Writings of Mr. Ricardo and his Followers, 1825.
- 4) A Letter to a Political Economist, occasioned by an Article in the Westminster Review on the Subject of Value, 1826.
- 5) Essays on the Pursuit of Truth on the Progress of Knowledge, and on the Fundamental Principle of all Evidence and Expectator, 1829 (2d ed. 1841)
- 6) Rationale of Political Representation, 1835.
- 7) Money and its Vicissitudes in Value as they affect National Industry, 1837.
- 8) The Right of Primogeniture Examined, in a Letter to a Friend, 1837.
- 9) A Defence of Joint Stock Banks and Country Issues, 1840.

これら幾多のペイリーの著作のうち最も有名なのは、A Critical Dissertation (匿名)であつて、それは當時の學界に非常のセンセーションを惹起したものである。この者は、直接には、一八二四年三月、四月、五月の The London Magazine に現はれたリカード學徒の主要なる一

人、デイ・ハンニイの筆になる Dialogues of Three Templars on Political Economy, に對する反駁として、リカード經濟學の不備缺點を突かんとせるものである。彼は忌憚なくリカードを初めその學徒の價值論に於ける曖昧混亂を指摘し、その理論の矛盾撞著を暴露した。このペイリーの著書に對しては、早速 The Westminster Review に於て亦匿名の反駁文が出で、更にペイリーは他の小冊子——A Letter to a Political Economist, 1826——に於て自説を再び主張、固執した。その後マサヌはその著 Definitions in Political Economy, 1827, pp. 125-202. に於て、キ・ン・マイは The Logic of Political Economy, 1844 に於て、それ／＼ペイリーの所説を駁するところがあつた。

ペイリーの學說價值論、特にリカード批評を窺はんとするには、この A Critical Dissertation に就くが一番よい。他の書物にも茲に問題とするところを取扱つてゐるものもあるが、それはこの書物に於て展開された主張を繰り返へし述

1) Confession of an Opium Eater の著者

べたにすぎない。依つて私は左にこの書の内容を紹介したいと思ふのであるが、その結構、内容を詳しく紹介することは、こゝに許されぬことであり、且又私の不十分乍ら已にその内容に就て若干紹介批判したこともあり、旁々、こゝにはたゞその要領の一斑を述べ、彼れの經濟學史上に於ける地位、重要を髣髴せしめるに止め置く。

三

ペイリーに依れば、價值には何等積極的、絶對的若くは眞實の價值なるものはない、たゞ相交換される二物が相對立するその相對的關係——相對價值があるのみである。即ち彼に於ては、價值は、アダム・スミス、リカードの『その物の所有が齎らすところの他物を購買する力』に外ならない。だから價值には比較され得る二つの物がなければならぬ。他の物に關係なく一物に就てのみ價值を云々するは不可能である。物の價值が他物購買力であるならば、何等かの購買するものがなければならぬ。

斯様に價值を二物の關係と見るならば、價值は比較される二物の一物に就ては變動するが、その他物に就ては變動しないとは云ひ得られぬ。AのBに對する價值は變動するが、BのAに對する價值は變動しない、若くはAはBに對する價值に於て上るが、BはAに對する價值に於て動かぬ、など、考へるのは不合理極まる。それは地球の太陽からの距離は變はり得るが、太陽の地球からの距離は從前と同じである、と考へると等しく實に馬鹿氣た話である。例へばA、B二つの商品があつて、その價值は同じであるとする。ところが何等かの事情によりAの生産に以前の二倍の勞働量が必要となつたに拘はらず、Bの生産には依然として同じ丈の勞働量しか要せないとするならば、AのBに對する價值は二倍となるであらう、換言すれば、Aは二Bと交換され得るであらう。併しBは假令以前と同じ勞働にて生産さるゝにしても、以前と同じ價值を有つてゐない、それも變化する。何故なればBはAの半分として交換されないか

ら。

彼は價值概念についての彼れの考へを左の如く要約してゐる。

(一) 價値なる言葉が二物の間の關係を示すものなる以上、一貨物が或る他の貨物に對する明らかなる若くは暗黙なる、關係なくして、價値を有ち、或は價値に於て變動するとは云はれ得ない。その價値は何らかに於ける價値、若くは何らかに對する關係に於ける價値であらねばならぬ。

(二) 二物のこの關係は他の一物に關して變動することなしに、この一物に關して變動することあり得ない。若しAがBに對する關係に於て上るならば、Bは固定的なるを得ずして、Aに對する關係に於て下らざるを得ない。

(三) 一貨物の價値はたゞ或る他の貨物の分量によつてのみ言ひ現はされ得るにすぎない。

(四) A貨物の價値が上ると云ふことは、この貨物の同じ分量が、以前よりはそれとの關係に於てA貨物の價値が上ると云はるゝところのB貨物のより大なる分量と交換されることを意味する。

(五) Aの價値が下ると云ふことは、その同じ分量がBのより尠い分量と交換されることを意味する。

かくの如くベイリーは價値を定義して、さてリカアド及びその學徒の價值概念に對する曖昧の態度を非難する。リカアドは、一方に於て、アダム・スミスの價値の定義——他物購買力——に同意し乍ら、他方に於て、それを生産するに常に正確に同じ勞働分量を必要とするが如き何らかの貨物が見付かるならば、その貨物は不變の價値を有つであらう、と云ふ。だが價値が單に關係を示すものである限り、この命題は眞であり得ない。この貨物は何に對して不變の價値を有つか？ 相關するものは何か？ さうであるかも知れぬ。が不變の勞働分量にて生産せらるゝが故にさうではない。何故といふにこの場合勞働は依然として或る一定の量であるのに、若し他の貨物の勞働が増加したり減少したりす

るならば、この貨物と他の凡ての貨物との價值關係は、リカアド自身の原理によれば、直ちに變動するであらうからである。かくてベイリーに依れば、「價值は二物の關係を示すものであるから、價值はその物の一つのみに影響する所の原因が生ずることはできないので、二つの原因から、即ちこの關係がその間に存在するところの物にそれ／＼働く二組の原因から、起らねばならぬ」と云ふことは、論ずる迄もなく明らかである。それゆゑに彼は「スミス、リカアド、マルサスなどが用ゆる眞實價值及び名目價值の名稱を絶對的に排する。彼に在りては、一貨物の價值は貨幣價值、穀物價值、布價值など、それと比較される貨物に従つて、數限りなくあるものであつて、それらは何れも等しく眞實價值であり名目價值であり得る。」

ベイリーの價值概念はかくの如くあく迄も相對的であるから、リカアドの如く異なる時期に於ける貨物の價值を比較することは、即ち所謂價值の不變尺度を見出さんとすることは、問

題にならない。「價值は同時代の貨物間の關係である。何故なれば斯くの如きもの、みが相互に交換され得るものであるから。而して若し吾々が一時代に於ける貨物の價值と他の時代に於けるその價值とを比較するならば、それはこれら異なる時代に於て、その貨物が或る他の貨物に立つ關係の比較たるに過ぎない。それは一時代に於ける何らか個有の、獨立の、性質と他の時代に於ける同じ性質との比較ではない。それは二つの異なる時代に互に交換される所の比率若くは相對的分量の比較たるに過ぎぬ」。彼に在りては、不變の價值尺度たり得る貨物の存在は物理的に不可能であるばかりでなく、かゝる貨物を見出さんとすること自身が已に矛盾であらねばならぬ。

更に彼は勞働の價值、利潤、價值の尺度、價值評價の方法、價值と富との差別、價值の尺度と原因などの問題について詳しく論ずるが、その根本的立場は、さうして又こゝに問題とするに足るもの、主要點は、ほゞ以上の如くであ

1) Bailey, *ibid.*, p. 16.

2) Bailey, *ibid.*, pp. 72-3

る。

要する所ベイリーのリカード批評は、一面、

リカードが價值(眞實價值)とその表章形態たる交換價值(相對、比較價值)に對する曖昧なる態度を指摘し、價值の不變尺度を見出さんとする要求を自らを斥けることに於て、その學問的長所を有つが、他面、眞實價值の概念を排し、雜然たる價值の相對的表章のみを以て價值概念の凡てであるとなし、價值の量的問題のみを取扱ひ、その質的問題を全然顧みざること、に於て、その致命的なる缺陷を有つてゐる。これらの缺陷を矯正し、價值と價值形態、價值の量的質的問題を渾然たる全一體の下に統一、説明する迄には、なほ可なりの時代の進歩を必要としたものである。(完)